

第1回ひがしおおさか地方創生ラウンドテーブル	
日時:令和6年10月27日(日)	場所:本庁舎1階・22階
参加者:市民委員43名、構想日本・コーディネーター、市・事務局	
コーディネーター : A 班 構想日本 総括ディレクター 伊藤 伸 B 班 構想日本 シニアフェロー 定野 司 構想日本 フェロー 柏崎 亮太 オブザーバー:株式会社 Liquitous 代表取締役 CEO 栗本 拓幸 エンジニア 西村 和海	
議事要旨: 1. 開会 2. 市長あいさつ 3. 自分ごと化会議説明 4. 東大阪市の市政全般について概況説明 5. トルクひがしおおさか(一般介護予防事業)の取組紹介 6. 交流(トルクのコーヒー試飲提供、障害者事業所手作り製品の提供・紹介 こどもの意見聴取について(Liqlidの使い方説明))	<省略>
7. グループワーク <u>A 班</u> <自己紹介、東大阪市の子どもと高齢者を取り巻く環境について感じていること> 委員 A-1: 今の子どもたちについては、私が小学生だった頃よりも、中身は子どものままだが、雰囲気は大人びているように感じる。 高齢者については関わりがなく、分からない。 委員 A-2: 個々の状況は把握できていないが、子どもと高齢者の交流はあまりないと感じる。 委員 A-3: 子どもとあまり関わることはないが、外で遊ぶ子どもを見かける機会が少なくなったと感じる。高齢者については、独居の方が多く、社会とつながる機会が少ないように感じる。	

委員 A-4:

12 歳の子どもがいるが、危険が多く、まだあまり 1 人で出かけさせていない。高齢者に関しては、両親が住むマンションは高齢者が多く、こだわりをお持ちの方が多い印象がある。

委員 A-5:

学年が下に行くにつれて子どもの数が減っている点が気になる。一方で高齢者は増えている。少子高齢化について、みんなで考えていきたい。

委員 A-7:

市として子ども・高齢者を手助けする制度はあるものの、それをアナウンスしていない印象がある。知る術がなく、制度を利用できていない方が多くいる。利用するにも手続きが難しい。どうにかできないか考えている。

委員 A-8:

荒本にあった商業施設が閉店したことで、高齢者の方も含め、居場所が無くなったように思う。

委員 A-9:

共働きでの子育ての大変さ、年金を受給しながらも働かなければならない大変さは職場の同僚から聞いている。一緒に考えていきたい。

委員 A-10:

東大阪市は男の子にとって優しいまち。市内には、ラグビー場やサッカー場、野球場もあり、これほど運動場があるまちはないと思っている。ただ、運動している子どもはみんな男の子。女の子のチームが活動しているところを見かけない。また、日陰が少ないのも辛い。子どものときからジェンダー平等であってほしい。

市内に仕事場があるが、周りは空き家が多い。防犯の面で怖いと感じ、暗くなったら自動点灯する街灯を設置すると、周りの方に歩きやすくなったと感謝された。

特に高齢者は暗いと側溝などに気づかず転倒しやすい。もっと歩きやすくなるといい。

委員 A-11:

姪と定期的に会うが、話しかけてもスマホに夢中。身内でも交流しづらい時代だと思う。高齢の親は、歩くことが辛く、外に出たくても出られない。子どもとしては少しでも外に出てほしいので、買い物など一緒に行くようにしている。

自分が高齢者になったとき、このまま東大阪市に住み続けていくのか考えることがある。友人とは、田舎への移住について話すこともある。今後住みやすいまちになっていけば住み続けたいとも思っている。

委員 A-13:

普段保護司として中学生や高齢者と関わっていると、表面には出てこない家庭環境に問題を抱えていることが多い。一見、恵まれているように見えても、常に寂しさを抱えており、家族との接触が少ないといった共通点がある。

私が子どもの頃は、悪いことをすれば他人である近所の方も叱ってくれた。今は家庭の中でも、親は子どもを叱らない。保護司として接する子どものほとんどが、本気で家族に接してもらえていない。

高齢者も同じで、以前は家におじいちゃんやおばあちゃんがいるのは当たり前であった。今はそうではなく、お世話ができないと施設入所を選択される。無理をしない介護という面ではいいが、認知が進んでいない本人にとっては、「追い出された」、「捨てられた」と寂しさを感じてしまうことも。家庭にいるときから、家族とのコミュニケーションが少なく、常に孤独感を抱えている方が多いように感じている。その辺りのケアをどうしていくべきかが課題。

「ラウンドテーブル」を始めとして、横文字や専門用語が多く飛び交っている。理解しづらいので、今後この会議を進めていくにあたっては、できるだけ分かりやすい単語で説明してもらいたい。

コーディネーター:

引き続き気をつけていきたい。

委員 A-14:

自宅の周りに学校が多いが、子どもの安全は気になっている。高齢者の方がボランティアで子どもの見守りをされているが、若い方も含めて子どもを見守っていききたい。子どもの倍くらいの高齢者が住んでいるように感じるが、舗装されていない道がまだまだ多い。

委員 A-15:

子どもから学校でのトラブルをよく聞く。一部のやんちゃな子どもに先生が手を焼いているといった話が多い。

長年住んでいるが地域について知らないことが多い。今回の参加を機会に勉強していきたい。

委員 A-17:

子どもと高齢者が接する機会が少ないように感じている。

委員 A-19:

市で「子どもファースト」を進めているとのことだが、一番大切なのは「命を守ること」。交通事故で亡くなる子どものことを考えると本当に辛い。そういうことのない社会を作っていきたい。

委員 A-20:

仕事で高齢者の方と関わる機会が多いが、たとえ喧嘩しながらでも家族と一緒に仲良く楽しく暮らしていくことが一番大事なことだと感じている。

暗く危ない道が未だ多い。高齢者にとっては危険。

子どもの数の減少は気になっている。遊んでいる姿を見ない。自分たちに何ができるか。見守ることしか今はないが、この機会に考えていきたい。

委員 A-21:

地元は東大阪市ではなく、子どもはいないが、皆さんとは違った視点から意見を言えたらいい。妻が高齢者に関わる機会の多い仕事をしているので、状況など聞いていきたい。

委員 A-22:

小学生の頃は、学校で地域の高齢者による童話の読み聞かせや、土日に茶道を教えてくれることもあった。ただ中学に上がると、高齢者に関わることがなくなり喪失感を感じている。一緒に話したり、活動できる時間が増えたらいいと思っている。

委員 A-23:

地元は東大阪市ではない。また日中は東大阪市外で仕事をしているので、東大阪市のことを知る術がない。子どもが今後大きくなり、自分が高齢者になったときのことを考えて、色んな情報を聞くことができればと思っている。市のためにできることがあれば、参加していきたい。デジタル技術を活用した情報発信は日中働いている方、共働きの方にとって便利。市の制度や市内のお店の情報等、子どもや高齢者に伝わるといい。

委員 A-24:

マンションに住んでいるが、高齢者に関わることが少ない。小中学生の頃は学校内で地域のイベントが開催されることもあったが、高校に上がるとそういった機会もなくなった。祖父母は近所に住んでいるが、生活リズムの違いから会いに行くことが減った。昨日ちょうど会いに行くと、とても喜んでくれた。高齢者に関われる機会をもっと持ちたい。

委員 A-26:

小学校の数は減っていくなかで、高齢者施設は増えている。また外国籍の子どもが増えている印象がある。

委員 A-27:

私自身がそうだが、コロナ禍の休校で学習機会が減ってしまった。
車以外の交通手段がない地域では高齢者の孤独死が目立っているように感じる。

コーディネーター:

昨年と比較すると、今回は東大阪市に長く住み続けている方が多いように感じている。
交通マナーや舗装されていない道、夜道の暗さについては前回も意見として出していたところ。

B班

<自己紹介、「子どもファースト」「高齢者」について感じていること>

委員 B-27:

子どもの中には愛情に問題を抱えている子がたくさんいる。愛情が足りない子が多い背景には、働く親世代が忙しく子どもとのコミュニケーションの時間を十分に取れていないことが問題と考える。今回のテーマの中心である高齢者と子どもについて考えていく中でも、やはり子どもと高齢者の間の世代が、どれだけ子どもや高齢者に対してコミュニケーションを取る時間を作ることができるかが大事ではないかと考えている。そのような施策について皆で意見を出していきたい。

委員 B-26:

子どものいじめや自殺が無くなる社会になってほしい。高齢者の特別養護老人ホームの入所待機が問題となっているため、スムーズに施設入所できる状況が整うと良いと思う。

コーディネーター:

特別養護老人ホームを増やすと、介護保険料の負担が増えるという一面もある。第一に健康寿命を延ばす必要がある。

委員 B-26:

まず高齢者が介護を必要としないような元気な状態が理想であると思う。自分自身も自分のことは自分でできるようにあり続けたいと思う。

委員 B-16:

現在は過度な「子どもファースト」になっていると思う。しわ寄せは教職員にいき、業務への負担となっている。このような状況を変えられるよう、市民としての意見も出していきたい。

委員 B-15:

「子どもファースト」を実現したいと思う。地域のつながりが希薄になっていると実感している。子どもたちは様々な環境下にいるため、学校や家庭ができることにも限界がある。子どもに対する学校と家庭の役割を明確にしつつ、そのうえで地域ができることについて意見が言える場をきちんと作らなくてはいい。今回の会議を通してそれぞれの気づきになればいいと思う。不登校の学生も多く、子どもだけでなく家族も悩んでいる。教師側から学校に来てほしいというだけではいけない。お互いを認め合って対話し、様々な意見をもとに前に進む必要があると思う。

コーディネーター:

家庭でやらなくてはいいことが忘れられていても、学校側から家庭でやってくれませんかということはなかなか言えない。学校側からは叱るときは叱らなくてはいいが、場合によっては遅刻してきた学生を怒るのではなく、よく来たねと声をかける等の寄り添いも必要である。

委員 B-24:

本市の小学校や幼稚園の統廃合が進んでおり、顕著に少子化が進んでいると実感する。子どもの声がたまに聞こえてくるとやはりこちらも元気が出る。少子化として一番の問題は、子どもが生まれないことだと思う。また、高齢者にとっては自身が認知症になること、そして在宅介護等における家族の負担についても心配である。

委員 B-23:

認知症の親の介護をすることは大変ではあるが、施設に入らずに家にいたいと本人が話しており自宅で一緒に暮らしている。自分自身が親に育ててもらった恩返しをしたいと思っているため、この状況を助けてあげたいと思う。

委員 B-21:

子ども政策に取り組む他市では子どもが増えている。東大阪市でも同じようにしたら良いと思ったが、周りの市町村からその市に子育て世代が集まっていることを考えると、それが本当に良い策なのだろうか。具体的な打開策になっていない可能性がある。もっと難しい社会の課題なのではないか。

コーディネーター:

物事の本質だと思う。日本全体で考えなければならない課題である。

委員 B-20:

子どもや高齢者を含め、生活に苦しむ人が少なからず一般的な生活が送れるように、市町村や国で取り組むべきだと思う。保護的なことばかりすると画一的になってしまい、子どもや高齢者にとってどうなのかとも思う。当然病気や認知症という自分ではどうしようもない問題が迫ってきたときには、それを社会で助けなくてはいけない。毎日平凡に暮らすことが一番の幸せなのかという問題もあるが、そのように暮らすことができない方がいるのは事実である。そういう方々に対して、手を差し伸べるのではなく一緒に考えて進んでいけるような社会になると良いと思う。

委員 B-18:

発達障害や家庭に問題がある子どものデイサービスに従事したことがあるが、やはり家庭で共通しているのは、愛情が足りていない、もしくは間違った愛情である。市のサポートとして、親の教育や子育て、また子どもがどのような気持ちで過ごしているかということまで考えなければ、ずっと空回りしてしまう。また、現代の子どもは情報媒体を持っているため、様々な情報や意見に触れている。例えば親が勉強しなさいとだけ言っても、勉強しなくて良いという意見の人が他にいるため大人に刃向かってしまうように、大人や先生の言うことをずっと聞いていれば良いという風潮ではなくなっている。大人がどのように子どもに教育したらいいのか考えていく必要があると思う。

委員 B-17:

東大阪市内で子どもと一緒にいきたい場所が大変少なくて感じる。花園中央公園のような子どもと遊びに行くことができる場所が、もう少し近くにもあれば良いと思う。あと、公園で遊んでいる子どもがほぼいない印象がある。子どものためにまちが変化するにあたって、財源を公園の整備に充てるのも良い方法なのではないかと思う。

コーディネーター：

公園というのは使っていなかったらただの空き地になってしまう。使われて初めて公園である。

委員 B-14：

小・中・高校が同じ敷地内にある高校に通っているが、学園祭や運動会も別々で行っており、日頃より全く関わりが無い。もっとなにか交流や関わりがあると良いと思う。

委員 B-13：

勉強するために図書館へよく行くが、机が占拠されており勉強ができない。永和図書館等にたまに行くが、寝ている方や占拠している方が多い。さらに勉強してはいけないという決まりがあり使用できない施設もある。子どもは自宅でなかなか勉強できず、夏は暑くて外で遊ばず、自宅でゲームをして過ごしてしまうことも多い。子どもに限らずもっと勉強等を自由にできるようなスペースを開放してもらえれば、そこで交流もできるようになると思う。文化創造館にも使用できるスペースがあり、以前利用したことがあるが、まず知っている人が少ない。あまり情報が無いので、もっと発信していくと良いと思う。

コーディネーター：

施設利用を促すために、どのような情報発信やPRをしたら多くの方へ届くと思うか。

委員 B-13：

見る方が限られないように、SNS 等でわかりやすくするほうが良い。ホームページで調べ、わざわざ現地に行って申込みしないといけない。仕事等で時間を取ることが難しい方も多いので、もっと簡易に予約ができるような申込方法があると良い。

委員 B-12：

今までの意見を聞き、どの問題も数珠状に繋がっていると感じた。根本的に何をどのように良くすればいいのかという答えが出ず、もやもやしている人も多いと思う。発達障害の子どものうち一定数は家庭に問題を抱えている子がいるのが現実である。当事者である子どもと高齢者が頑張るのか、それともその間にいる親や大人、社会人と言われる私たちがどのように頑張っていけば良いのかを順次考えていきたい。子どもの権利については、権利の行使を受け入れる社会になるため、行使できる場を整えておかないといけない。障害者のセミナーを受けた際、昔は例えば足が不自由で車いすに乗っている方が社会に出ていく上で、まちにスロープが無く付添人も自分で探して障害者本人が頑張る社会であったが、今は社会がきちんとスロープを用意しよう、彼らをきちんと受け入れる環境をつくろうという考えに変わってきているという話を聞いた。当事者たちが頑張っていってほしいのはもちろんのこと、その方々を受け入れる社

会を作っていくことが私たちの考えていかななくてはいけないことだと気づいた。子どもと高齢者のことを考える上でも、やはり根本的にはできる限り助けてあげたい、協力してあげたいという気持ちをみんなが一人一人持っているが、自分に余裕がなくてできない部分が現実としてあると思う。自分自身も助けたいと思うものの、仕事があり何かを働きかけることができない現実がある。そのような部分について皆さんと考えていけたらいいと思う。

委員 B-11:

要支援・要介護の方が多いと聞いたが、高齢者になる前の働き盛りの頃に無理が重なり、将来的に要支援・要介護状態になってしまうこともあると思う。子どもや高齢者に対する支援を考えることも必要だと思うが、今働いて頑張っている方々に対しても、何か支援できるようなものを考えたほうが良いと思う。

委員 B-10:

昔は地域のコミュニティで防犯や教育における人との繋がりがあった。時代が変わり、現役世代、子育て世代、高齢世代、それぞれの世代で大変な部分がある。そのような中で、子どもと高齢者をどのように繋げていくのか。その間に現役世代が入って社会全体が繋がらないと、おそらく社会は成り立たないだろうと思う。昔は例えばお茶碗とお箸があれば、隣の家でご飯を食べさせてもらうような小さな繋がりがあり、地域のコミュニティにより社会が成り立っていた。また、最近東大阪市へ引っ越してきて、近所の神社での祭りを見かけた。地域の繋がりで運営されているようで、引っ越してきて初めて知ることができた。将来に明るい夢を持つことができる社会づくりを、すべての世代が自助、共助、公助の中で、まずは自分で行動する、それができなかつたら周りの方に助けてもらう、最後には国が助けるという連携が無いと、何事も前へ進んでいかない。東大阪市の良い部分を些細なことでも見つけて広く展開していくのが重要であると思う。

委員 B-7:

友達の中には、なかなか学校に行くことができない不登校の学生もいる。先生から学校に来てほしいと言われ、友達や先生に気を遣われている気がして、余計行きづらいという話を聞き、もっと先生や子ども同士が、その不登校の子に対する接し方を変えていくと良いのではないかなと思う。

コーディネーター:

子どもの皆さんはおいでと言われると余計反発して行くことができないこともある。先生の顔色を見て自分の行動を決めたりする場面もあると考えられる。

委員 B-6:

トルクひがしおおさかの取り組みは初めて知った。昔から働いている方はやはりとても仕事熱心で、このように活躍できる場はどんどん増えていくと良いと思う。東大阪市はものづくりのまちと言われているので、東大阪市の小中学校や高校で社会見学として地元の工場に訪問し、地元で働くことができる場所を知ってもらうことで、働くことができるまちづくりとして取り組んでいくのが良いのではないかなと思った。また、親世代のモラルがあまり良くないと感じるため、学校の授業参観等でも子どもの発言を促すだけでなく、大人も考えさせられるような道德の授業参観のようなものを行うのも良いのではないかと考える。トルクひがしおおさかについては、地域のワークショップで小学生と一緒に活動する、クラブ活動に参加する等して、高齢者と子どもの繋がりが増えると思う。高齢者が子どもに教える機会があることで、地域のコミュニティの場にも慣れて、まち全体での子どもの見守りも行うことができると思う。

コーディネーター:

キャリア教育とか職業教育は子どもに人気のある事業である。

委員 B-5:

自分たちが幼かった頃はみんな外で遊んでいたが、最近は近所の公園でも子どもがワイワイしているのをあまり見かけない。おそらく自宅でSNSに依存している子どももいるのだと思われる。あと、世代を超えて関わり合う機会があまり無いと思う。高齢者から子どもが知らない知識を教えてもらい、高齢者の方も自分のことを話すことでストレスが減り幸せな気持ちになると思う。親世代から、今の若者はこうだというネガティブな発言をよく聞くので、お互いに話し合うことで、若者に対する偏見も無くなってほしいと思う。

委員 B-3:

高齢人口が増え生産年齢人口が減っている中で、やはり健康寿命が延びたら、高齢者が働いていかないと社会そのものが成り立たないのではないかなと思う。たとえ働くという方向性でなくても、トルクひがしおおさかのように、高齢者の方が自分でできることややりがいを見つけて、社会に還元していくような活動がもっと増えると良いと思う。高齢者が持っている知的な資産を子どもに伝えていくことができれば、高齢者も子どもも嬉しいし、高齢者が子どものこと見守ってくれると子育て世代も自分の仕事できて嬉しい。課題として、若い人たちが自分のことを知られることや干渉されることに対して拒否感があると感じる。ただ一方で人と繋がりたいという思いはあり、そのギャップをうまく拾っていけたら良いコミュニティづくりに繋がっていくと思う。

委員 B-2:

小学生の頃から地元の祭りに参加している。大人も子どもも祭りに向けて一丸となって楽しんで交流している。高齢者は防犯や炊き出しを担当し、子どもは太鼓演奏に励んでいる。地域でお互いに挨拶や声かけをするようになり、祭りという同じ目標に向かって地域のつながりを感じる。世代を超えてより一丸となることができるようなコミュニティができれば良いと思う。

委員 B-1:

結局のところは税収を上げることが一番だと思う。布施商店街も以前はにぎやかだったが、今は寂れている。他市の魅力あるまちと何が違うかと考えると、やはりお金があって活気があるまちかどうかという部分であると感じる。ただそれが全てではない。東大阪市の良い部分もある。交通の便が良く、現在もモノレールを作っており、人が動くことのできる手段があるのでまだ可能性を秘めている。まちが活性化するような商業や製造業の盛り上がりがあれば良いと思う。

8.今日の会議まとめ

A 班

- ・今回はまず「子ども」にスポットを当てたい。「子どもファースト」に関しては前回議論しており、提案書を作成した。どんな提案があったのか紹介したうえで、何が必要なのか議論していきたい。
- ・高齢者と交流の場を持ちたいといった意見が出ていたので、次回後半では子どもと高齢者の関わりについて議論したい。
- ・次回までに、子ども・若者世代はどんな交流の場があれば行きたいと思うのか、大人側はどんな場があれば子どもと接点を持てるのか、考えてきてほしい。

B 班

- ・子どもと高齢者の間の現役世代がどのようにサポートしていくのかについて議論していきたい。
- ・子どもや若者は支えられる側ではなく支える側にもなりうるということについて議論していきたい。(⇒本人の生きがいややりがいに繋がる)
- ・今回は議論の内容をコーディネーターより図に表して提供する予定である。

9.事務連絡

10.閉会

<省略>